

道徳心と利他性の数理解析Ⅲ

—統一的な視点による分析—

内田智士（倫理研究所研究員）

はじめに

『倫理研究所紀要』の20号および21号にそれぞれ『道徳心と利他性の数理解析—道徳心はどのように社会的規範に発展するのか—』、『道徳心と利他性の数理解析Ⅱ—自動機械モデルによる規範の分析—』と題した小論を投稿した。それらに共通した問題は、二者間の協調関係形成に際するジレンマが人々の道徳心によってどのように解決されるのかということであった。またジレンマの解決を通して、様々な道徳心が競合しながらどの道徳心が社会に広まり規範として定着するのかを、数理モデルを用いて議論した。いずれの場合もそこでの解析において、二者間の協調関係形成に際してのジレンマはゲーム理論における囚人のジレンマを用いてモデル化されていた。

両論文の違いは、(社会における個人の行動に関する)情報の公共性にあった。つまり前者においては、集団中の全メンバーが他の全メンバーが行った行動についての情報を完全に知っているという、情報の公共性に関する仮定が置かれており、後者の論文ではこの仮定が緩和されていた(集団中の一部の者しか他人の行動を知りえない)。結果、情報の公共性に関する仮定がなされず、情報が共有されていない状況であっても、道徳がジレンマを解決するのに一定の役割を果たすことが示された。しかしその一方で、情報の非公共性は、社会に定着する道徳心に大きな影響をもたらすことも同時に示された。すなわち、情報が公共的である場合には極めて有効な道徳心であっても、情報が非公共的になった途端に機能しなくなるものが存在したのである。

以上のような状況で、本稿の目的は2つある。1つは、上述の両論文において比較した2つの規範がなぜ重要なのが、統一的な視点からその背景も含めて述べることである。この部分は文献を参考にしながら書かれている。2つ目は、別タイプのジレンマについて規範の有効性を調べることである。囚人のジレンマが表しているジレンマ的状况は、協調関係形成に際するジレンマの1つに過ぎない。そこで、協調関係形成に際する別のジレンマを取り上げ、それに対して道徳がどの程度の有効性を発揮するのかを調べたい。そして囚人のジレンマで特に重要とされている規範について、どちらの規範がより広範囲に機能しえるのかを調べたいのである。こちらは拙著論文に基づいて書かれている。